

風の時代を読む研究会

風の時代を読む研究会（第3回）講演 議事録

日 時：2025 年 2 月 21 日（金）17 時から 19 時

場 所：一般財団法人アーネスト育成財団内会議室

参加者：

- （1）下斗米伸夫先生（ゲストスピーカー：神奈川大学特別招聘教授／法政大学名誉教授）
- （2）森下あや子（座長：日本経済大学大学院教授）
- （3）西河洋一（理事長）
- （4）吉池富士夫（芝浦工業大学理事）
- （5）長谷川一英（(株)E&K Associates 代表）
- （6）下斗米秀之（明治大学経済学部専任准教授）
- （7）小平和一郎（専務理事）
- （8）松井美樹（事務局・理事）

小平：財団の専務理事をしております小平と申します。早速ですが、座長をしている森下のほうで進めていただきます。

座長（森下）：アーネスト育成財団の研究会に下斗米伸夫先生にお越しいただきありがとうございます。ホットなロシアに 11 月に行かれたということで、みなさんお話をお聞きするのを楽しみにしております。下斗米伸夫先生ご講演をよろしく願いいたします。

■ 講演 ■

プーチン政治二五年とウクライナ和平

1. ロシアとの出会い

下斗米伸夫：下斗米です。最初にロシア、当時のソ連に行ったのは、田中角栄さんが日ソ国交で70年代を突破しようとしたときに文化協定を結んだのが1975年（昭和50年）で、かれこれ 50 数年以上経つ。当時のソ連、見ると聞くととは全く違っていた。モスクワに留学して博士論文を書くことが目的だった。

デタントという時代

デタントという時代、田中角栄総理もそうであるが、ニクソン、キッシンジャーがモスクワに乗り込んで、コカ・コーラは資本主義であるが、ペプシコーラは人民の友だなんていう選択的な使い分けの時代でもあった。

その頃からデタントでは、情報公開を徐々に始めようとして取り組んでいた。短波ラジオを持っていき、NHK の紅白歌合戦をモスクワ大学で 12 月 31 日に聞いて、キャンディーズも、「シクラメンのかほり」も、モスクワ大学で聴いていた。丁度モスクワ大学の学生寮の目の前に中国大使館があった。まだ文化大革命で、中国の方は全然そういう情報も開かれていなくて、毎日、自力更生で畑をやっているのを上から見ていた。そういう時代であった。

それから 10 年後、英国留学後ソ連に立ち寄った時に、ゴルバチョフのペレストロイカが始まった。その頃日本では「ゴルバチョフって何者ぞ」という感じだったが、いきなり彼はテレビを公開し始めた。

テレビが新鮮な情報をどんどん出すようになる。ゴルバチョフは用意された赤絨毯の上を通らず代わりに裏口から入って行ってきて、改革への意図を伝える。ところが、翌日の『プラウダ』新聞、プラウダとは真実という意味であるが、それを見ると、「ゴルバチョフは価格体制の改善について語ったと非常にそっけない。つまり、テレビで見る層と新聞を読む層との間にギャップがだんだん出てきたことがおもしろかった。

自分たちの社会に問題があるから「外を友達にしよう」というのがゴルバチョフの戦術

昔、成蹊大学に勤めていたが、成蹊大学で 1986 年パラボラアンテナを買い、そのなかにモスクワの電波が赤道にある人工衛星から極東に電波を流していたので、テレビ画像が見られた。そのときチェルノブイリの原発事故が起きた。

ゴルバチョフは腹心の改革派、カナダ大使のヤコヴレフを党宣伝部長に呼んできて、何でも自由にテレビで自分たちの社会が問題だということを明らかにする形で、情報公開をした。原発事故の火消しのために、鉛の塊を持って 30 秒間走って投入するといって、放射能を消すための人海戦術をやるとかとてもない犠牲をはらうことをやっていた。

そういうことまで段々明らかにして、自分たちの社会に問題があるから「外の社会を友達にしよう」というのが簡単に言えばゴルバチョフの新思考外交の戦術となった。その結果、レイキャビックというアイスランドで米ソ首脳会議をやった。そして核兵器全廃を含めて議論した。

核兵器が搭載可能な長距離から短距離まで、いろんな種類のミサイルがあった。ヨーロッパ戦域を対象としたメカニズムがあって、射程 500 キロから 5,500 キロの中距離核ミサイルを全部やめるということで、西側の信頼を得、それがベルリンの壁崩壊に繋がって、西側との関係改善にうまくいくかと思われた。その後ソ連が崩壊して 30 数年経つ。

ロシアの政治は実は宗教が相当絡んでいる

ロシアの政治は、実は宗教が相当絡んでいる。ロシア正教と聞くと特に正教というのはキリスト教の源流であるが、非常に分かりにくい。

カトリック、プロテスタントの違いは個人の西側の良心の問題であって国家の問題は関係がない。カトリックのトップはローマ教皇である。各国にプロテスタントたちがいるが、アメリカは特にプロテスタントの中でも最もピュアな人たちが英国から逃れて作った国である。ところがロシアはさらに古い正教の流れだ。

NATO というものを蘇らせたのが、アメリカのつまずきの始まり

冷戦が終わったとき、日本の方がアメリカより技術などいろんなところで力があつた。当時は半導体もそうだった。しかし、冷戦が終わったのに 1990 年代、東西関係に関しては政治的に結局 NATO というものを蘇らせ東方拡大をはじめたのが、私はつまずきの始まりだと思っている。軍事同盟をどんどん拡大させることで、世界をコントロールする力を当時の米国のクリントン大統領は持とうとした。

今、トランプがやろうとしているのは、おそらく西半球位はアメリカのコントロールする領域だと考えていると思う。グリーンランドは西半球の地図を見ると、アメリカとカナダの上にある。西半球位は古い大陸から離れて、コントロールする力を米国は持っているが、現状では、全世界に 100 ヶ所も軍事基地を設けて、中東も、旧ソ連も、そういったところまで全部コントロールする力を米国はもう持っていない。

ドルという基軸通貨としての米国通貨は依然として世界でも 6 割程度の支配力をもつが、しかしアメリカ車は、ドイツのフォルクスワーゲンにも、日本のトヨタにも、そしてとうとう中国の電気自動車にも負けつつある。

したがって、米国の特に五大湖周辺の産業労働者たちが失業し、食えないでインフレで苦勞しているのに、何で中国や、あるいはウクライナでの民主党が始めた負け戦に資金を出す必要があるのか、という批判が彼らから出てくる。コロナからウクライナ戦争まで、アメリカは基軸通貨であるので、通貨を印刷することができる。しかし通貨発行量がこんなに増えた結果、世界中がインフレになり、特にアメリカの普通の人たちが困っている。

アメリカはリアリズムで、常識でやろうとしている

それをカットするために、今の国防省が典型であるが「もう在外基地を縮小する」といい始めた。大陸ヨーロッパに、かつて 30 万人位アメリカ兵がいた。今は 10 万人以下だと思う。ウクライナに NATO が 3 万人位秘密の兵隊たちを送っている。そういったコミットはもうやめる。ポーランドとかその辺からも、あるいはヨーロッパからも、アメリカ軍が引くということを今度の新しい国防相は言い始めている。できるかどうかは別であるが。

どこでも軍縮をやると、アメリカの最大のジレンマは、日本の昭和の軍縮もそうであるが、軍隊の超エリートが「勝ったのになんで俺が失業するんだ。負けて失業するのはわかるが」という問題が出てきている。その問題は、日本でも第一次大戦後におきた。軍縮のジレンマがある。もうそろそろアメリカはリアリズムで、常識でやろうということである。

急速にプーチンと関係改善をして外交関係を取り戻す

これで、今、トランプ政権は急速にプーチンと関係改善をして、外交関係を取り戻して、ウクライナ戦争をやめ、コーラ会社、マクドナルドあるいは日本の自動車、JAL とか、そろそろ解禁という停戦後への準備を始めたと思う。そろそろエネルギー協力を米国はサウジアラビアも含めてやっていく。

今までは上限が 1 バレル大体 60 ドルが一つの基準であった。ソ連もロシアも石油価格が下がると経済が悪くなる。ゴルバチョフが出てきたときから 15 年位、1 バレル大体 15 ドル位の時代が続いて、このプーチンの 25 年は、次第にエネルギー価格が上がって 1 バレル 60 ドルから 100 ドル。ピークはリーマン・ショックの直前は百数十ドルまでいったと思う。日本の我々の研究費ではモスクワの普通のホテルに泊まれないくらい、今の日本のホテルみたいな値段が取られるほど活況を呈したことがあった。ほとんど今、外国のお客さんはロシアにいないが、そういう時代が比較的早く来る可能性がある。

5 年ぶり昨年（2024 年）の暮れ、モスクワに行ってきた

私は 100 回以上モスクワに行っており、いろいろな人と話をするが、2019 年以来、5

年ぶりに去年 10 月末モスクワを訪れた。街の雰囲気も戦時下とは思えず、戦時ポスターやスローガンも多くはない。

今回の訪問時、日本人武藤大使らは首相からの信任状をプーチンに提出した。プーチンは、日本に対立は求めなかった。

モスクワ大学で日本の政治について講演した後、ソチでプーチン大統領を囲む会があった。今回は、畔蒜（あびる）という時々テレビに出ていらっしゃる方と 2 人で行ってきた。畔蒜氏が、「トランプが出てくるのをどう思うか」という話と「日本との関係改善に動くか」という質問をした。

アメリカからは専門家は来なかったが、日本人が呼ばれたというのは、日本についての関心をずっと持ち続けているということだと私は理解している。何よりも昨年 7 月半ばのテロでトランプが抗議の手を挙げて勇気を示したことは素晴らしいことだと思う。大統領選挙の 2 日後にソチの会議を設定したというのは、プーチンはアメリカとの関係改善に、トランプ共和党とだったら話ができるということだったのだろうと思う。

ちなみに、北京経由で行ったが、今、ロシア人たちは北京経由で東京に続々と観光客が戻っている。昔ドルを海外に持ち出すのは結構うるさく調べられたが、今は簡単である。ただ VISA や Master カードも使えないが、中国の銀聯カードは使える。

しかし、どうやら VISA や Master もそろそろ動く用意をしている。どこまで制裁解除をするか、いろいろ問題はある。日系ビジネスは、そろそろ制裁解除の可能性に期待している。ただ日本マスコミの訪口者は激減している。

プーチンは、ヨーロッパ人から、インド人から、イランのアラグチという元東京大使が今、イランの外務大臣であるが、そういう人たちからの質問をうけても即座に答える。日本でも、それだけできる政治家が早く出てきて欲しいと思っているほど何でも対応できる。

2. 11 月 7 日プーチン大統領バルダイ会議

このバルダイ会議ではかれこれ 15 年位付き合っている。基本的に西側 50 人位との交流の場だったが、今は、中国、インド、インドネシア、イランなどの会議体である。英米は少なくなった感じがする。

プーチンの会議での発言を次に紹介したい。このウクライナ戦争はどうしてこんなに揉めたのか。なぜ戦争を始めたのか、ということである。

プーチン大統領、バルダイ会議の演説要旨

（１）世界は西側諸国の覇権から多極化へと向かっており、変化は不可逆的

西側諸国は、自らの支配を維持しようと過去のやり方に固執しているが、世界は既に変化しており、西側諸国はこの事実を認識し、新しい国際秩序を受け入れるべきである。

（２）新しい世界秩序は、多様性、協力、相互尊重に基づくべき

西側諸国は、自らのモデルを普遍的なものとして他国に押し付けるべきではない。各国は、それぞれ独自の価値観や文化を持ち、対等な立場で対話を行うべきである。

（３）ロシアは、西側諸国とは異なり、対立ではなく協力を重視する

西側諸国は「我々か、そうでなければ敵か」という考え方をしているが、ロシアはそうではない。ロシアは、西側諸国との対話を望んでおり、共通の利益のために協力する用意

がある。

（４）BRICS は、新しい世界秩序のモデルとなる可能性を秘めている

ブラジル、ロシア、インド、中国、南アからなる BRICS は、強制ではなく相互理解に基づく協力の精神を体現している。西側諸国も、BRICS との協力を検討すべき。

（５）国際社会は、気候変動、貧困、不平等などの課題に共同で取り組む必要がある

西側諸国は、発展途上国がこれらの課題に対処できるよう、資金と技術を提供すべきである。

（６）ロシアは、自国の主権と安全保障を守るとともに、多極化に向かう世界において建設的な役割を果たしていく

ロシアは、西側諸国の圧力に屈しないが、相互の利益に基づく対話は常に開かれている。

バルダイ会議へのコメント

昨秋年と比べても、プーチンは世界政治と経済への対応で自信を持ったとの印象であった。プーチンは、報告の 1 時間をふくめ 4 時間しゃべった。メモも見ない。司会のルキヤノフが適宜コメントすることで、緊張も（中立論）あったとの印象を持った。

米国大統領選挙では、民主党バイデンのウクライナ戦争に批判的なトランプ再選が大きいように思えた。しかも激戦区 7 州での完勝、上下両院での勝利したことは大きい。

ハリス民主党の「グローバル関与的国際主義」の敗北、背後に米国の巨大な赤字国債、基軸通貨ドル支配の限界が出てきている。

10 月のロシアにおける BRICS 諸国会議で参加した国の世界人口に占める割合は四割以上である。またトルコ、インドネシア、タイ、ベトナム、スタン国などが参加した。

G20 首脳会談でもウクライナ戦争のロシアへの理解が広まっている。

トランプがいう「常識の革命」とは、どちらかというと保守的な革命

それから昨日（2025 年 2 月 20 日）、トランプが「常識の革命」ということを言って就任式に臨んだ。プーチンともう 1 回話をするに今なりかけている。

共和党の 2 期目と相性がいい。共産党の幹部たちは、共和党と共産党は同じ「共に」があるという。共和党と共産党とはお互い保守で、むしろ保守で非常に強力な立場でやってきた人たちである。安全保障ということについては米ロは合意が作れると思う。

バイデンとトランプとの世界観の違いが際立つ

私は「常識の革命」というトランプの発言を引いたが、アメリカで革命とは何もロシア革命、あるいはフランス革命とは違い、一八世紀後半から旧大陸から縁を切るという意味だと言われている。従って「常識の革命」とは、どちらかという保守的な革命である。

結局今のアメリカの分断が激しい。西海岸東海岸にはリベラルで、お金持ちで、大学教育を受けたような人たちが住んでいるが、ど真ん中のオハイオとかウィスコンシンだとか、ペンシルバニアだとかとは異なる。

かつてペンシルバニアは、ピッツバーグ製鉄など工業化のもとで鉄鋼業などの凄まじい仕事をしている。「ディア・ハンター」という映画をご覧になった方は想像できると思う。映画は、スラブ系の鉄鋼会社が舞台で、そこでベトナム戦争に行く話である。

今、鉄鋼は日本製鉄が買うか投資かと、揉めているほど寂れてしまった。自動車に至っては、かつて民主党の時代にカトリックのポーランド系の労働者の票が五大湖周辺に1,000万票あった。この票が欲しくてクリントンという、正直言ってやや私から見れば失望した戦後世代のリーダーが、カトリック票が欲しくてポーランドまで NATO に加盟させた。これがウクライナ戦争の遠因となった。

NATO なんてゴルバチョフ時代にお役御免だったはずである。その軍事同盟を復活させポーランドまでを NATO に入れるというのが当時の了解だった。

トランプ勝因とウクライナ問題

私の友人の有名なアメリカとイギリスの外交専門家に聞くと、NATO 拡大には「アメリカの内政要因が相当大きい」という。アメリカの五大湖周辺の7州のいわゆるスイングボート（浮動票）が、政治的な雰囲気はどっちに行くかで、選挙は決まるという背景があるという。

従って、民主党がカトリックの票、1,000万票をそこで持ってくるので、今回、共和党はアラブの票を、イスラエルでガザに対する戦争を非常に評判が悪いので、共和党も親イスラエルということには変わりはないが、主として今回アラブの票を、結局250万票の差をつけて勝ったというのが、トランプ、共和党が勝った理由である。

バイデン前大統領は、息子のハンター氏がウクライナ・ロビイストである。正直言って、民主党の政治家はお金にきれいではない。そういう意味では共和党の方が、ロシア人たちも安全保障などで、交渉できるのは昔からそうであった。

ウクライナ担当はケロッグ特使、元軍人である。国家安全保障会議、元はウクライナ支持派、いまは紛争凍結派・制裁部分解除、占領領土の容認へと向かうものと思う。「領土の分断」が鍵である。ケロッグ特使が、プーチンとの「100日計画」という戦争終結プランを出している。

トランプ特使任命後、ゼレンスキーは領土譲歩を示唆

ゼレンスキー大統領は、NATO 加盟と引き換えに、ロシア軍占領下の領土の放棄を受け入れる姿勢を29日英国のスカイTV・ニュースで示した。

- (1) ウクライナ政権が支配領土を NATO の傘下に置く、停戦合意を成立させる。
- (2) ゼレンスキー大統領は、NATO 加盟が「戦争の熱い段階」を終わらせ、ウクライナの占領されていない地域を保障すると述べる。しかし NATO 加盟には、ウクライナが国際的に認められた国境を認識していることが条件となっている。
- (3) ウクライナ東部は当面、合意の対象外となろう。
- (4) ゼレンスキー大統領発言は、プーチン大統領にとっての心理的勝利であり、ウクライナの NATO 加盟の可能性は低いと見られるとスカイ・テレビが報道した。
- (5) 停戦交渉は朗報だが、ロシアにとって NATO 加盟は不可能、凍結案も難しい。

3. ウクライナ戦争とは

侵攻の目的はウクライナの非軍事化、非ナチ化、独立以来の中立化だった

プーチンはウクライナ侵攻を3日で終わらせる計画で2022年2月14日に開始した。

「特別軍事作戦」、10 万余の作戦、キーウ占領が目的ではなかった。

しかし、実際には国連憲章違反のプーチン戦争となってしまう、2024 年 11 月 20 日で 1000 日と長期化してしまっている。侵攻の目的はウクライナの「非軍事化」「非ナチ化」「独立以来の中立化」だった。

ゼレンスキーは、直後ロシアとの中立化交渉に応じ、2022 年 3 月 29 日にトルコの仲介でイスタンブール合意停戦と領土問題の凍結で合意しかけていた。

しかし、米国のバイデン大統領、特に英国のジョンソン首相の強硬姿勢がキーウに武器提供をする代わりにロシアの弱体化・プーチンの打倒を迫り、西側の介入により紛争の長期化を招いてしまった。

三つの複合紛争

(1) 二つのウクライナ、ウクライナ内部の対立が内戦へ(2014 年～)、

(2) ウクライナとロシアとの戦争(2022 年 2 月～)、

(3) N A T O とロシアとの代理戦争(2022 年 4 月～)

という 3 つの性格の異なる戦争が同時進行している。

ウクライナ内部での東西間の文明の衝突(二つのウクライナ)が起きている。

今年は 4 月 20 日が復活祭の日で、イースターがカトリックもプロテスタントも正教も同じ日である。ウクライナの最大の問題は国内に正教派、西側にカトリック派がいて一つの国家の中に二つの事実上の国があるという問題を抱えている。

日露戦争のときに、二百三高地の向こう側にいたのは、だいたい東ウクライナのコサックという、それも騎馬部隊がロシア側にいて、それと日本兵との肉弾戦になった。あの部隊が基本的にソ連期になっても、騎馬部隊の中心でベルリンまで行く戦車隊の裏にいたのはこの騎馬部隊。どこでも馬に乗れる軍人というのはエリートである。

コサックがいるロシア正教会でロシア語を話すロシア人

そういう意味で東ウクライナ正教のコサックは、ガチガチのモスクワ派である。

ウクライナの地図でご覧いただくと、このピンクのあたり(図 1)が、コサックがいるロシア正教会で、どちらかというとロシア、ロシア語の話者と言っているが事実上、ロシア人である。

人口 5,000 万人の国であるが(今は 3000 万?以下)、ドンバスあたりの地域に 1,000 万人が住んでいて、しかもここは軍需産業、そして石炭が取れたので、フルシチョフという有名なソ連のリーダーは、炭鉱夫からモスクワの地下鉄を掘るためにモスクワに呼ばれてスターリンのインナー・サークルに入った人物である。

ブレジネフは、フルシチョフのもとでミサイル、ロケットを、このピンクのこの辺に軍事産業があり取り組んでいた。この辺は、石油、石炭が取れる。この辺だけでウクライナ経済の 3 割位を占めている。



図1 ウクライナの地図

ロシア帝国にもソ連にも入ったことのない、ハプスブルグのカトリックの人たち

これに対し、西側のゼレンスキのTシャツの色（モスグリーン）ではないが、この地域は何かというと、ロシア帝国にもソ連にも入ったことのないハプスブルグのカトリックの人たちの世界である。ここはほとんどヨーロッパである。

この二つの「文明」がぶつかっている。第二次世界大戦のときにモスグリーンのところが、1939年にソ連に併合された。ここにいたキリスト教徒は、カトリック系でナチスがやってきたとき1941年に、モスクワ大学の近くまで攻撃してやってきた。

そのときウクライナの中にもう一つ、ユダヤ人の人たちがたくさん住んでおり、世界のユダヤ人のうちのおそらく500万人位がウクライナに住んでいた。その人たちは、ここオデッサの港町からニューヨークにそのまま船で行ける。

ユダヤ人、実はウクライナと今でも関係する

我々は、ウクライナ問題でなぜユダヤ人たちが活躍するのか疑問をもつ。

ブリンケン国務長官、ネタニヤフはイスラエルの首相、旧ソ連帝国の中のユダヤ教徒が大体500万人いた。そういう人たちが、それこそニューヨークのエリス島に行って、それで反対側のリトル・オデッサというところにおいて、ブリンケンの祖父らもそこに移っていた。ニューヨークはコンパクトにまとまったユダヤ教徒たちが、実は今のウクライナとも関係する。

大戦中には、西ウクライナの人たちがナチスに協力して150万人位のユダヤ人を虐殺した。この人たちが、第二次世界大戦が終わった後、アメリカとイギリスの特殊機関が関与してカナダにこの人たちをつれていった。そのような背景があってカナダ政府が今回ウクライナ側で非常に動いたということがある。トランプ政権とも仲が良くない。

4. 米国問題としてのウクライナ戦争

この戦争の裏側は宗教戦争としての側面である。

アメリカの政治はディアスポラの力が強い。ユダヤ人は結束がいい。人口の2%、3%し

かないのに、あれほどの政治力を持っている。

カナダのウクライナ人と NATO 東方拡大が結び付いた。だからこの地図でいうとピンクとモスグリーンの戦いというのが、このウクライナ戦争の裏側、宗教戦争としての側面である。

今度のウクライナの戦争は、アメリカの国内の対立と重なり、国内の民主党と共和党の貧しい労働者層を巡る戦いになった。

貧しい兵士になるのが中西部の白人層、二一世紀の中東戦争で動員された、半分失業になっている人たちが半年後には遺体で帰ってくる。そういうのが 20 年位ずっと続いた。したがって、そういう人たちの不満が、今回のトランプ革命の反戦と孤立主義の一つの支持者になっている。

ネオナチとは

これに対し、先ほど言った東海岸、西海岸では金融グループとか、そういった旧ユダヤ人、かつては貧しくやってきた人たちであるが、今世界のアメリカの富の大体半分位を IT 長者とか、いわゆるオリガルヒが支配している。残りの半分が非常に貧しいという極めていびつな状態となっている。中産階級がなくなった。「これおかしいよね」というのがトランプ問題だと思う。

プーチンが言う「ネオナチ」とは、そういう非常に特殊な環境でやってきた。ネオナチというのは、ブラジルの勝ち組と負け組という話に通じる。

つまり日本が負けたことを、戦争が終わっても信じなかったブラジル移民の人たちの話があるが、かつての西ウクライナの栄光みたいなことをやっている人たちのナショナリズムが、ウクライナ語の世界である。西ウクライナのカトリック的な文化をやりたい。

従って、正教のクリスマスは 1 月 7 日であるが、これを 12 月 25 日に戻す。正教やロシア人たちが使っているロシア語を禁止して、アルファベットでキリスト教を教えようとしている。英語を第二外国語にしている。人口の 7 割はウクライナ語とロシア語をともに話し、それぞれあまり変わらない。

実はスラブ系の言葉はどこでも似ており、ポーランドの言葉でも、プラウダと言ったら「真実」だし、スヴァボダと言ったら「自由」という意味だ。ただし、それを表記するのにカトリックの人たちはローマナイズされたアルファベット、これに対し正教の人たちは、キリル文字という、スラブ人たちが聖書を勉強するために使う言葉として発明された言葉である。その間に「文明の衝突」が生まれ、結局それに火をつけたのが、今回の悲劇の元になった。

5. 特別軍事作戦（SMO）とウクライナ戦争

ウクライナ戦争の各段階

第一段階 SMO からイスタンブール交渉まで（2022 年 2 月-3 月）

第二段階 ジョンソン訪宇から 9 月のロ動員と 4 州併合まで

第三段階 2023 年 1 月、消耗戦でのロシア軍の持続から優位へ

第四段階 2023 年 6 月、ウクライナ反転攻勢の挫折（— 9 月）

第五段階 イスラエルの 10 月ガザ紛争から 2024 年 5 月の動員令

第六段階 2024 年 6 月国際和平首脳会議挫折とウクライナ「勝利計画」 (8 月)

第七段階 トランプ射撃事件から大統領選挙勝利 (2024 年 11 月) へ

ウクライナの内部の対立と、アメリカの両党派の対立と、そしてロシアとウクライナの対立、こういったものが全部ショートして 3 年前の軍事介入になった。プーチンからすればあくまで作戦なのである。戦争ではない。

消耗戦か、電撃戦か

もっともロシアは短期決戦を想定した欧米の戦争観とは異なり、歴史的には長期的な消耗戦を想定した戦略を採用している。チンギスハンの大陸の戦争法、スキタイ人以来金属兵器を使用している。ソ連工業化の遺産で、ロシアに産業基盤が残っているので、活用している。結果として、ロシアは時間の経過とともに経済テクノロジー力、兵器、銃弾、兵員数でウクライナに対し数倍優位に立っている。消耗戦での勝利となった。

戦車戦でも泥沼で戦うので、西側の電撃戦思想や重戦車では対応無理である。

ウクライナは 2023 年の反転攻勢の失敗により失地回復の可能性が低下している。NATO 内にも紛争凍結を主張する声が上がっている

東部の 4 州の辺り、ロシア語を話している人たちのところはロシアが簡単に制圧

ウクライナの人口は最大 5,000 万でそのとき 90 万を義務的に兵隊にしたが、プーチンがウクライナのキーウを攻めたとき 10 数万。もっとも KGB の予想では花束をもらって歓迎されると思って軍楽隊を連れて、ハルキウ（昔、ハリコフと言う）に、150 人の軍楽隊を連れて、150 万都市を攻撃して、あっという間にやられた。誤算だった。

ただしプーチンは、ロシア軍はこの東部の先ほど言った 4 州の辺り、つまりロシア語を話している人たちのところはあっという間に制圧した。なぜなら、そこは侵略でも侵攻でもいいが、ホームで戦うからだ。ロシア語で喋る人が周りにいる。そこにウクライナ軍がこの 10 年間 NATO 軍基地を作ってやっているもので、今、陣地を取り合う凄まじい陣地戦をやっている。二一世紀に一九世紀の戦争をやっているようなものだ。

経済制裁が強めたロシア軍需経済

(1) 西側諸国が実施したロシアへの経済制裁は、意図とは逆にロシア経済を強化する結果となった。

(2) 制裁により海外に逃れていたオリガルヒが富とともにロシアに帰国し、国内投資が促進された。

(3) 輸入代替効果により農業などが成長し、BRICS 諸国との経済関係も強化された。

消耗戦で疲弊するウクライナ

(1) ウクライナは政情不安と宿痼（しゅくあ：長く治らない病気）の腐敗が深刻化していて、経済的に困窮している。

(2) ゼレンスキーの勝利計画でロシア本土に攻撃している。

(3) ロシアはスウェーデン支援の AWACS を絶滅した。また超音速ミサイルでの通常攻撃

をしている。

(4) 西側諸国からの財政支援は当初はともかく、ウクライナ戦況悪化に伴い減少傾向にある。

(5) 米国議会では、ウクライナ支援に反対するトランプ派が勢力を増し、ウクライナは事実上の半破綻国家になる。

(6) 徴兵令の困難（25 才から、西側は 18 才からを強要）不満、徴兵逃れで逃亡が倍々ゲーム；総計 6 万人）を極めている。

(7) 5 月に動員したが、総計 70 万人以上（ボレル上級代表を含む）が失われた（死者、傷病）と思われる。

2024 年の各国事情

(1) ロシア国内では、プーチン大統領の支持率 8 割強は依然として高い。

(2) ドンバス地方ではロシアへの帰属意識が強く、プーチン大統領を支持する声が多い。

(3) ルガンスク、ドネツクの 2 州はロシア語話者が多数いる。残りも深いロシアとの繋がり（ザポリージャ・コサックは正教徒）を持つ。

(4) 一方で、ウクライナでは、ゼレンスキー大統領の支持率が低下している。

(5) 強制動員による厭戦気分の高まりや、政権による反対派への弾圧が支持率の低下の要因となっている。

(6) ウクライナ軍によるクルスク州への越境攻撃の失敗など、戦況の悪化を受け、NATO 内部ではロシア占領地域を容認する外交交渉派が勢力を増している。

(7) ロシア側は、ウクライナが 4 州の併合と同地からのウクライナ軍の撤兵を認めれば外交交渉に応じる姿勢を示している（2024 年 6 月 14 日、プーチン演説）

6. トランプ再登場

11 月 5 日米大統領選挙で共和党の反戦派トランプが、民主党バイデン系のハリス副大統領に勝利（250 万票差）した。とくに激戦 7 州（カトリック系を含め）ですべてトランプが圧勝した。

NATO・バイデンの逆襲・プーチンの対抗

アメリカ軍や NATO 軍は、海と空の戦争を展開する能力は世界最高である。ただし泥臭い、泥沼の中で戦車戦をやるとか、あるいは白兵戦をやるのはとてももたない。ロシア人たちは 1000 年来、チンギスハンの時代からそういう戦争をやってきた。

ユーラシアにサラという地名がたくさんある。サラトフとか、サラエボとか、サライとか。あれはチンギスハンの武器庫という意味である。工業地帯であるので、炭田とか、あるいは鉄工所を作る前に岩塩とかウランとかが取れる。

今度ゼレンスキーがもともと提案したレアメタルがあるだろうとトランプが 3,500 億のドルの軍事支出をそれで払えという言い方をして、それが今回 2 人の大喧嘩になっている。

元々はそういう大地で戦争をやるときには地上を 3 倍位の兵力で囲んで、それで逃げるところを追っかけるというユーラシアの陸上戦あるいは騎馬戦、このような伝統をずっとロシア帝国軍、ソ連軍、ロシア軍のいずれも持っている。

今回、体力勝負になったときプーチンは勝った

アメリカ NATO 型のミサイルや I T や何よりも戦車。

結局第二次世界大戦でドイツ軍が負けた理由は、ドイツ軍の戦車は、60t、70t ある最高級のタイガー戦車を作った。ソ連が作ったのは、T34 という 45t か 50t もない小さな戦車である。泥沼で戦うときは軽い方がいい。ヨーロッパの石畳、あるいはアスファルト道路で戦うわけではない。こういう戦争の地政学があって、今回、体力勝負になったときプーチン側は勝った。

なまじっか NATO 軍で、フランスで教育を受けた軍隊は、結局機能しなかった。90 万人位だったウクライナ軍が、どれ位気の毒なことに亡くなっているのか分からないが、正しいと思われる情報では、ウクライナ軍は 2025 年はじめ 28 万人位になっている。中間層の人達がいなくなっている。

プーチンは、組織としての軍を非軍事化という形で無力化した。大体 10 万人位脱走兵がいる。一昨年、去年までは 25 歳から 60 歳までの男は出国禁止にして、これはほとんど使い果たしたので、今は 18 歳から 25 歳の若手を使えと西側、特にイギリス軍、フランス軍が言っている。

その結果何が起きているかというと、今ウクライナの高校は女の子ばかりになって、男の子は逃亡している。富裕層は 15,000 ドルを軍の幹部にお金払って、ヨーロッパかマイアミかそういったところ逃げてしまった。貧困層が戦っている。

ロシア側も似たような問題がなくはないが、ロシア側は大都市の学生はあまり応募しない。どちらかというと地方のところになんと志願兵制度であるから、40 万か 50 万位のお金、これは地方の貧しい地域にとっては大変なお金で、そこを志願兵として、ロシア兵は戦っている。

一昨年四人 5 万人位を使って、6 ヶ月間働けば生き残れば釈放ということで結局 17,000 人位亡くなったと思う。この人たちをロシア側は陣地を構築する時間稼ぎに使って、これで大体ロシア側の防衛ラインをつくり、4 州を併合し、勝利した。

北朝鮮軍はロケット、ミサイルを開発することばかりで戦争経験が無い

体力勝負ということになったとき、北朝鮮軍は使っても大したことはできないという説である。むしろ北朝鮮軍は、これまでロケット、ミサイル、核実験ばかりやっていて地上戦をやったことがない。朝鮮戦争以来、北朝鮮軍は、鍛えて、鍛え抜いた冷戦をやっていて 1968 年にはソウルを攻撃した。あれ以降、彼らはロケット、ミサイルを開発することばかりやってきたので戦争経験が無い。

おそらくプーチンに頼んで金正恩が、戦争経験をさせたかった。ドローンを使ってはいるが、大体 19 世紀的な持久戦、ゲリラ戦をしている。ゲリラ戦というか、持久戦、消耗戦である。

I T 型 21 世紀戦争と 19 世紀型の二百三高地での戦いが一緒になっている

今はかつてと違って I T でドローン戦争になっている。ドローンに対してどういうふう

になっているのが、今のウクライナの現状だと思う。こうなると、ヨーロッパもアメリカも弾薬と兵器をもう作れなくなっている。

自動車もアメリカは作れない。ボーイングだって、アメリカ軍のヘリコプターみたいな攻撃機も墜落している。アメリカの軍事工業力の無さが暴露されてしまった。ミサイルとか大型ロケット、対艦弾道弾なんていうのは、1 万キロ飛んで、百メートルの円内にポンと落とすという技術で競っていて、北朝鮮はこれらはまだ大気圏に入ると燃え尽きてうまくいかない。ひょっとしたら今それを改善するかもわからない。それに核爆弾を搭載するというのが、これまでの数十年間、冷戦期にやってきたことである。

オレシニクミサイルの脅威

今ロシア側が、超音速のいわば 4000 度から 5000 度になる火の玉のような高速、超音速ミサイル『オレシニク』と言うが、このオレシニクミサイルをつくった。

ゼレンスキーの方はソ連が解体され、国内にあったミサイルを全部モスクワが後継国家になった。ミサイルがあったらモスクワ攻撃しないだろうというので、核ミサイルを持ちたいという密かな願いがあり、数回にわたって、プーチンが今回の攻撃をする直前にも、ゼレンスキーはそういうこと言ったことがある。

だからロシア側は、核ミサイル、戦術核を使うというふりをして、なんと非核兵器で、西側が打ち落とせないマッハ 10 のミサイルでもって、ウクライナの虎の子の兵器工場を壊した。地下工場でおそらく「汚い爆弾」(ダーティ・ボム) というウランを混ぜたようなものを利用しようとした。本格的な核のプルトニウム型、濃縮ウラン型である北朝鮮以前の段階であろう。潜在的にはウクライナは工業国であるので、その能力があるから、その準備をしようとしたときにそれを壊したのが、去年 11 月のロシアのオレシニクミサイルである。西側はそれに対抗する手段を持っていなかった。

これがトランプ休戦、トランプ停戦に行こうとしているもう一つの理由だろうと思う。

そういうわけでロシアは何だかんだ言っても、戦車だとか第二次世界大戦の古い戦車をそのまま残しておいてそれを使ったり、内部を改造したりというようなことをやりながら、しかし最新のものは作れる。これはロシア人がこのユーラシアで 1000 年近く生きてきた生き方である。

ロシアというのは同時にユダヤ教徒大国でもある

チンギスハンだとかモンゴル人だとか、あるいはイスラム教徒、かつてイスラム教徒は 1000 年間、いろんな意味で文明の先進国であったので、それを防ぐために黒海やカスピ海の辺にいたのがユダヤ教徒である。

今のクリミア半島には先ほどたくさんユダヤ人がいると申したが、これは正確に言うとユダヤ人ではなくて、トルコ系のユダヤ教徒である。私の人生で一番美味しかったベーグル、ニューヨークよりも美味しいベーグルは、なんと新疆ウイグル自治区であった。これはあの辺のトルコ系のカシュガル人がいる。ユダヤ人というのは、2000 年にもわたって古代ユダヤ国家が潰れた後は特にそうであるが、貿易だとか、銀行だとか、金融だとか、そういったメカニズムを、いろんな形で貿易のルールだとか、そういうネットワークをシルクロードまで持ってきた。

ロシアというのは同時にユダヤ教徒大国でもある。だからユダヤ教徒は、両方と戦っているって側面がある。トランプの娘婿はクシュナーというユダヤ人である。よく考えるとサウジアラビアでサウジの皇太子と、今のトランプとそれからプーチン、いずれも旧約聖書でいう「アブラハムの一族」なわけである。それが枝分かれして正教に行くか、イスラムに行くか、カトリックになるか、ユダヤ教徒にとどまるか。

それでアブラハム合意というのを、共和党のトランプはサウジアラビアとイスラエルとを和解させるというやり方をして、それにプーチンをかませるというメカニズムにしている。エネルギーを掘りまくれというトランプの哲学と、民主党の環境でこういう CO2 になるから云々という、こういう物語とは全く違った哲学を持っている。

そういう意味では、プーチンとトランプは話が合う。

最新のウクライナ大統領世論調査 (2024 年 11 月 15 日)

これは、2024 年 11 月 15 日の世論調査結果であるが、実はゼレンスキー大統領の任期はもう終わっている。

候補名	ザルジニー	ゼレンスキー	ポロシェンコ	ブタノフ
第1選好	21	16	7	6
第2選好	21	6	3	12
総合	42	22	10	18

図2 ウクライナの世論調査

ゼレンスキーは、喜劇役者であった。大統領の役割をうまくウクライナのテレビ局を握っているユダヤ教徒であるコロモイスキーが大統領の振りをさせる学校の先生だったという。やったらうまくできて、本当に大統領になってしまった。

ポロシェンコというのが本当の NATO を導入した前大統領である。そして、ザルジニーが今一番人気であるが、この人が NATO 型の軍隊にしようとした人物である。ところがゼレンスキーは、大統領の役割を演じた人物で、ロールプレイングが大変お上手である。

最初出てきたとき半年間は、彼は対ロ和平派だった。もともと辺地語のウクライナ語を喋らなかった。ウクライナ語は大統領にならないと勉強しない。だから喋れない。だからゼレンスキーも大統領になって勉強した。ウクライナ語とロシア語がどの程度違うかというと、65%は同じ、違いは35%も言われる。喋ったらなんとなくわかる。

私がモスクワに50年前にいたときにキエフに留学した日本人は、皆ロシア語を喋っていた。ウクライナは軍事産業の中心で、ロシア語を通じて世界の物理学だとか数学だとか、そういった世界と繋がっている。ところが、そのときに田舎の言葉として残っていたのを、ソ連崩壊後に国語にして、国語を喋れないと公務員になれないとしたので、東ウクライナのエリートがみな外れ、これに対し、西ウクライナと真ん中のキエフの人はどちらでも喋れる。

そういう意味では、ゼレンスキーというのは、本来は対ロ和平派だったが、今や立場が逆転したザルジニーは、ゼレンスキーに外されたのでイギリス大使になって、今は和平派

として人気は 42%である。

実際はゼレンスキーの大統領任期が終わっているのに、プーチンは話をしない

最新の支持率の数字は 17%。トランプが 4%と言ったのはどういう数字を見たのか分からないが、実際は、ゼレンスキー氏は大統領任期が 2024 年 5 月で憲法上終わっているから、プーチンは彼とは話をしないとやっている。理由はこれからの平和条約、ソ連が崩壊したとき西側と口約束のみで NATO 禁止協定を作らなかった。NATO 基地を作るか作らないか、それとも別の枠組みにするかを決められずにゴルバチョフは去ったので、その後の混乱があった。プーチンは法学部を出ているのでこの人たちは要するにきちんとした文章を作ることが自分たちの仕事だというのがある。ゼレンスキーは 5 年任期が終わっているのに正式ではない。

その意味では、軍縮交渉をやろうとしたら、ヨーロッパでミサイルをどれだけやるか、ミサイルといっても飛翔時間 7 分位である。昔はソ連崩壊のゴルバチョフ時代にヨーロッパの基地からモスクワを攻撃するのに必要な時間は 30 分かかった。

今、ウクライナに NATO 軍基地が作られると、もう 5 分か 7 分で、もうプーチンは決断する時間はほとんどない。IT に戦争が任されてしまう時代になるので、その辺をきちっとやるメカニズムをアメリカとか NATO だったら作れるというのがプーチンとトランプの会談がセットされる理由だと理解している。それを処理した段階で、ウクライナの大統領選挙をやって、今の現職は名誉大統領になるかは分からない。

もう一つはヨーロッパ。フランスとドイツとイギリスは違うが、イギリスはなんといっても昔から海の国のチャンピオンである。世界中の海の政治学みたいな陸の王者とどうやってやるか、つまりは地政学である。

イギリスはユーラシア大陸に巨大な一つのパワーがあるのはまずいと分断

イギリス外交からすれば、ユーラシア大陸に一つの巨大なパワーがあるのはまずい。従って中国とロシアを分断し、ドイツとかフランスを分断するという戦略、イギリスがこの 500 年間やってきた、いわゆる地政学ということである。ナポレオンやヒトラーは許さないという哲学だ。

これに対しフランスとドイツが、これまたちょっと少しずつ違った理由で、独自のヨーロッパの王者はどっちかということで今、ドイツ経済は相当左前になっている。安いロシアのエネルギーが入ってこない。

フランスはフランスで、これまた移民問題ということで、そこにイーロン・マスクが、移民問題でもって、普通の人たちの不満をうまく流そうとしている。その意味では世界が 1945 年に作られたメカニズムとは別のメカニズムになろうとしている。

ドルに代わる通貨はない、表示機能を持つ

昨日、財務省の幹部と仕事をしてしたが、ドルに代わる通貨はない。それは表示機能だと言う。ビットコインにしたって、ビットコインがこれいくらを表示できないし、商売もできない。次第にそういうシステムは非西欧社会で、インドと、中国と、インドネシアとが BRICS に加盟している。人口的には、世界の 4 割位を占めているので、そこで支払い

手段を何とかドル以外で決済できないかを考えている。まだ、時間がかかるものとみている。いずれにせよ、アメリカと話をするというのはプーチンにとっても非常に重要なことである。

この戦争、もう戦う兵士がいない、弾薬がない

おそらくこの紛争、もう戦うウクライナ兵士がいない。金をいくら注ぎ込んでも兵士は作れない。弾薬もヨーロッパはラインメタルというところに工場はあるが、それは1万台も数世紀先の弾薬を今から作っておけない。155 ミリの大量の砲弾を撃ち合うということが、戦争の基本的なパターンになるとは誰も考えてなかった。

従って弾薬はもうない。弾薬を日本で作るというのものない。ドイツのラインメタル社が、それをやろうとしたが、投資家としてデタントになるかもわからないわけでやれない。

非常に奇妙な戦争をどうやって終わらせるかが、今年の重要な課題である。

ウクライナ国民の厭戦気分の高まり

BBC 外交特派員「クルスクのウクライナ兵はトランプをまっている。

ロシアのウクライナ侵攻開始から2年以上が経過し、ウクライナ国民の間では厭戦気分が高まっている。ギャラップの調査によると、2024 年にはウクライナ国民の 52%が早期の和平交渉を望んでおり、2022 年の 73%が戦闘継続を支持から大きく変化している。

前線でのロシア軍の快進撃、ゼレンスキー大統領の「勝利計画」に対する西側諸国の反応、そして次期大統領ドナルド・トランプ氏による軍事・経済援助の継続に対する不確実性など、戦争の将来が不透明な中で起きている。

戦闘継続への支持は、前線に近い地域でも遠い地域でも低下、2024 年にはすべての地域で 50%を下回っている。早期の和平交渉を支持するウクライナ国民の中には、和平と引き換えに一部の領土を割譲することに 52%が賛成している（ギャロップ）。2024 年秋は 64%へと増加、徹底抗戦派の 32%を倍増している。

まとめ

米国の分断がウクライナ戦争を生んだ。

- (1) ネオコンのロシア主敵論(兄弟国家に楔を打ち込む)
- (2) クリントン、バイデン民主党の党派的利益
- (3) 米国の「例外」国家、NATO 利益維持
- (4) ウクライナの宿痾の問題(腐敗、東西分裂と統一理念の不在)

同胞国家の甘えと指導者の過誤があった。

和平の機会を逃した責任がある。

指導者の過誤がまもなく3年となる戦争、来年の終結に期待と不安を持っている。

以上

■ 質疑応答 ■

プーチンの戦争、宗教が関係している

座長：ありがとうございました。私の大学は、実はウクライナで戦争が始まった 3 月 15 日に最初の留学生（避難生）を引き受けた。15 日に羽田に迎えに行った。ウクライナ語を話す子とロシア語を話す子と両方いて、1 名だけ政府関係の男の子がいたが、あとは全員女の子だった。先生の『プーチンの戦争の論理』という本を読んだ。そこで一番驚いたのが、宗教がすごく関係していることで、私達は宗教に疎い日本人である。

カトリックとキリスト正教が分裂するのが丁度 1000 年

講師（下斗米伸夫）：ラスコーリニコフという、例のドストエフスキーの「罪と罰」の主人公の名前が重要である。分裂主義者という意味であるが、今は古儀式派。神か、人かという、2 本指で十字を切るのが伝統的なロシア人であった。「モスクワが第 3 のローマ」という信仰である。

キリストが亡くなった後ずっと一番権威があったのは聖書が書かれたギリシャ（語）だった。ところがカトリックと東方正教が分裂するのが丁度 1000 年、紫式部の頃であるが、イー・スー・スーという、いわゆる三位一体という。

三位一体に変えたとは、神と人の他、あるいは父と子ともう 1 人、地元のローカルの神様の信仰を取り入れたのが、このスピリットという聖霊だ。

正教とヨーロッパのキリスト教は一番どこが違うかというと、ブルガリアだとか、セルビアだとか、正教の世界は国と教会とが一体化していて、どこか関係があって、従って国王が何とか宗に変わると、人々もそちらにいった。従って国家との関係が強いのが正教である。

東ローマ帝国が滅びたのが 15 世紀である。トルコのイスタンブール（コンスタンチノープル）は、イスラム教の中心となった。その結果、古い正教信仰を守るのは、そのソフィア姫と結婚したモスクワの大公だったわけで、モスクワの大公イワンが、ローマの東ローマ帝国の王女と結婚して、その結果、モスクワが「第 3 のローマ」になった。これが彼らの信仰の基礎である。ただしこれはキリスト教のいろんな国際会議とか、公会議というが、そういう決めるところで 1 回も正式に採用されたことはない。

しかし、ロシア人たちがなんであんなに威張っているかというと、自分たちはずっと面々と 2000 年前にゴルゴダの丘でああやって人類のために亡くなったキリストの教えをそのままずっと続いている古い信仰を今でも守ってきたというのがモスクワだという。

ロシア人は非常に保守的で、実は信仰心も厚い

モスクワは「第 3 のローマ」だという。何か非常に不思議な、国民国家にはなりきれない世界。世界のために救済してやるとだからロシア革命も、名前だけは全世界のプロレタリアートよ、団結力せよという。

ロシア人は実は非常に保守的で、実は信仰心も厚い。そういうことを思っていた人たちがいた。それがカトリックと半分和解してロシア帝国を 400 年前位に作った（1721 年）。このときに半分がカトリックと和解した。これに反対した人たちがモスクワ派で、ピョートル大帝が、近代化のために都をサンクトペテルブルグ、ペトログラードに移したときに反対したモスクワの頑固派がこのグループ。

一番極端に抵抗したのが、なんとアラスカまで行って、その森の中で信仰グループにな

った。今、アラスカの共和党は実はこのグループである。石油があるので穴を掘れ、穴を掘れとトランプが言う。そのアラスカのあそこにいるロシア正教徒の人たちは、非常に保守的な2本指で十字を切り、他の宗教の人とは基本的に交わらない。一番潔癖な人たちは通婚も自分たちだけでやる。そこまで仕切る人たちはなかなかいない。

ロシア正教会というものが非常に独特な発展を遂げて、その中で、逆に言うと今度はピョートル大帝の近代化を信じた人たちはプロイセンの女性を女帝にして、エカチェリーナとか、そういう女帝たちがキリスト教を守る最後の超国家組織として作ったのがロシア帝国とその象徴のクリミアの黒海艦隊である。

文明を守る

クリミアの黒海艦隊とは何かというと、実はイスラム教徒に占領されているイスタンブールもそうであるが、聖地エルサレムをいつか奪還すると。これは十字軍の発想である。だから西側は政教分離で、国際法の秩序云々とウクライナについて岸田元首相までもがいう。しかし、ロシア人がそれにピンとこないのは、自分たちは信仰を守ると、キリスト教文明を守るのだと。プーチンは「文明を守る」という言い方をする。

その文明とは、最後は聖地エルサレムというところが、キリスト教とイスラム教とユダヤ教の三つの世界の三大宗教の同じ一つの町が三大宗教の中心になる。だからユダヤ人たちが、シオンの門というのがそこにあり、「シオニズム」とよく言うが、そこにユダヤ人の3000年前の旧約聖書に書いてある、故地に戻るという。しかし、ロシア革命が始まった頃、1939年頃、あそこに5万人か、10万人位しかユダヤ教徒はいなかった。

ところがソ連には500万人位ユダヤ教徒がいて、よく普通のユダヤ教に関するユダヤ民族の歴史なんていうとスペインあたりからずっとディアスポラが、それでポーランド国王の許可を得て、ドイツの方言みたいなのを喋る人たちが、アシュケナージという形でウクライナに入ってきたという。それにしては数が多すぎる。

今出てきた新しい考え方は、実は遊牧民族のトルコ系の人たちの中にも、ユダヤ教徒を信じて、エリートたちがユダヤ教徒になった人たちが、黒海からカスピ海あたりにいた。

イスラエル国家、ロンドンのシオニストたちの考え方でヨーロッパの外に作った

第二次世界、これは第二次世界大戦秘話であるが、スターリンは乱暴な男であるから、あそこにいたクリミア・タタールをナチスの協力したという根拠が薄い理由で中央アジアに追放して、クリミア半島が空き地になった。

あそこにポーランドの収容所から連れてきてイスラエルを作ろうという計画もあった。ところが、ロンドンの世界シオニスト教会と、英米両軍それにスターリンも、ヨーロッパの中に小さくてもユダヤ人の国家を作ろうしたが、それでは問題を起こすから、ヨーロッパの外に作れというのが、ロンドンのシオニストたちの考え方で、結局1948年にパレスチナ人のところにイスラエル国をつくった。

実は赤軍の武器を持ったチェコ共産党の活動家たちが先頭で、赤軍の兵器でつくった国家がイスラエル。だからネタニヤフとブリンケンとゼレンスキーは、みんな同じユダヤ人という話は、そこから出てくる。今度の戦争は非常に難しい。ニューヨークには、超保守派のもみ上げを長くして黒い帽子をかぶっているユダヤ人がいる。こういう人たちは、近代派の金儲けのユダヤ人と反対な考えをもっている。

宗教あればお金あり、共和党系と民主党系のユダヤ人の金儲け

ニューヨークの中にもいろんなユダヤ人がいるし、イスラエルに今1,000万人いるが、超イスラエルを作った人たちはオデッサ周辺の宗教的シオニストというグループで、元々ソ連共産党の前のユダヤ系労働党グループというのは、同じ集団農地を作ったりした共産党と根っこが繋がっている人たちである。

よく見ると、ウクライナ戦争にも見え隠れする共和党系と民主党系のユダヤ人の金儲け。だからソロス財団というのが民主党のユダヤ・ロビー、バイデンが辞めるときに、ハンガリーのジョージ・ソロスという有名な投資家に自由何とかという勲章を与えた。彼がNATO拡大に献金した。ウクライナ戦争にはその金が相当入っている。

いまトランプ政権になって3,500億ドル使っているが、この金はアメリカが払ったはずだから、トランプがレアメタルで返せって言う話である。

『God and Gold』っていう有名な本を書いたミードという人がいたが、宗教あればお金あり、お金あればそれを守る権力、裏と表の権力あり、それが三位一体にぐるぐると回っている。世界史というのはそういうものだ。

ジョージ・ソロスとゼレンスキーは、非常に血が近い

西河：ジョージ・ソロスとゼレンスキーは、非常に血が近いという話がある。顔とか形がそっくりである。

講師：そうですね。しかもハンガリーで、フン族である。フィンランド系というのもハンガリーである。この人たちはどこから出てきたかというヴォルガ川にもともといて、ヴォルガ川にはブルガールと言う人たちがいて、川を漕ぐ人という意味であるが、これがブルガリアに行って、それからウンガルというかベンガルの人たちが、エストニアとフィンランド行った。

モスクワというのも実はフィン・ウゴル語である。「大きな熊」という意味である。遊牧民族であるから行ったり来たりしている。そういう宗教的なことと絡んでいる。本当かどうか知らないが、チンギスハンは非常に宗教的に寛容で、チンギスハンの周りには、結構キリスト教徒もユダヤ教徒もいた。

アイコンとかをやって、音楽を荘厳にやって、特に正教はとてつもなく綺麗で美しくて、大がかりな教会を作る。よく葱坊主のような建物、あれはイスラムでも11世紀からその頃に似たような宗教的な建物があつという説もある。中央アジアに行くと、ボハラというところにいるユダヤ人はボハラ・ユダヤ人という。ガザ周辺でユダヤ人移住民と称している人たちは、大体中央アジアから移住している。トルコ系のユダヤ教徒である可能性はある。だから、新疆ウイグル自治区に美味しいベーグルがあっても何の不思議もない。

私の考えは、相当普通の教科書に書いてあるようなロシア論とは違う。

普通であればガスプロムは止まるはずだが、なぜ動いているか理解できない

西河：プーチンには日本の意見を聞きたいので招かれたのか。実際、僕もプーチンと会って話をしているし、例えば日本が制裁を今回かけているが、普通であればガスプロムは止まるはずである。なんで動いているか。その辺が理解できない。

講師：今回、日本政府は経産省を中心に、相当いろんなネットワークを使い「サハリンのガスを止めてくれるな」ということで活動している。

西河：都合がいいように片方にはこう言って、その理屈がわからない。プーチンはちゃんと日本のことを考えてくれている。

講師：そうですね。

西河：武道をする人だし、礼儀も正しい人だ。広島に来て十字架も切ってくれた。アメリカ大統領オバマは、来ても何もやらない。

講師：おっしゃられるように、一番最初に東シベリアの天然ガスの利権を、いわゆる財閥の意見がわかれて、特に中国が、中国の大慶まで持ってこようとした。民間パイプラインのユーコスという会社がある。それは安全保障の問題になると、つまり、東シベリアが全部中国に買い占められると、これはまずいと言って森元首相とかが話をして、バイカル湖のこちら側を通して、これは国営のパイプラインである。パイプラインをナホトカ辺りまで繋げるという構想で、もう一つ北極海をどうしようかということもあった。

プーチンがアジアで中国と日本とをうまく競わせ、よく言えばそういう戦略を持っていた。今はこれだけ中露関係が改善しているが、プーチンの政策を見ると、中央アジア、北朝鮮、韓国それからベトナム、今 ASEAN、インドネシアそれからパキスタン、インド、イラン、それでサウジアラビア。中国周辺に非常にソフトなネットワークを、プーチンは作っている。アフリカはアフリカでまた別。

西河：トルコとも仲いい。

講師：トルコは特に。

今、ゼレンスキーはトルコに行っている

西河：今、ゼレンスキーはトルコに行っている。

講師：おっしゃる通り。結局、トルコとロシアの関係は、露土戦争というのが 17 回か何か歴史では戦ったと書いてある。これは宗教戦争である。別に政治的理由がなくても「イスタンブールは、もともとキリスト教のもの」と言って、そして最後は聖地管理権。

最初に、イエス・キリストの聖地墳墓教会という墓とされているもの、実際にはキリストの生家か何かがあそこにあるそうで、よく見ると我々が聞いているような教会はどこにもない。大体、正教系、ブルガリア正教会、セルビア正教会、ロシア正教会。コプト教というものがあり、コプト教というのはエジプト正教会である。我々で一番有名な話は、ソ連崩壊後、ユーゴスラビアで紛争が起きたとき、当時の事務総長はブトロス・ガリという人で、そこで一緒にやったのが国連の明石康元事務次長で、この人はコプト教徒で、エジプト正教会と日本人だった。ユーゴ崩壊を促したのが当時のゲンシャー外相がクロアチア独立を促して崩壊させた。

ドイツ人が火をつけたクロアチア独立であるが、結局はヨーロッパ人が、イギリスが何とか解決しようとしたがうまくできなかった。クリントンが結局、はじめて NATO を域外のセルビア爆撃で 40 日間やって、一番有名だったのが、中国大使館を爆撃したこと、これが NATO 東方拡大のきっかけになる。

ヨーロッパ人は自分たちでヨーロッパをコントロールできない。したがって、結局米軍と NATO が出っ張っていくしかないというのが、NATO 東方拡大の原点である。

なぜプーチンが後継者になったか

この問題が 1999 年、なぜプーチンが後継者になったのかの話とつながる。96 年まで彼はサンクトペテルブルグ（ペトログラード）の市長の国際担当副市長で、それほど有名でもなかった。ところが恩師のサブチャークというサンクトペテルブルグ市長が 96 年選挙で失脚し、お声がかかったのがクレムリン、サブチャークとモスクワ市長とエリツィン

が非常に親しかったので、ソ連末期に反ゴルバチョフ連合ができてきた。

そこで結局うまく KGB ネットワークを彼が持っていて、結局、彼らはクレムリンに入っ
てわずか 3 年後には安保会議書記になり、しかも FSB という旧 KGB の長官になる。

それで今のセルビアのコソボというところで 1999 年 NATO 軍とロシアの平和維持部隊が
ぶつかったことがあり、そのときプーチンは安保会議書記として指揮を執った。NATO 軍
のトップは、クリントンの懐刀のタルボット国務次官である。この人たちはみんな、タボ
ットもクリントンも一度オックスフォードにセシル・ローズ・フェローシップ奨学金で、
将来の幹部候補生としてオックスフォードに行く。その同窓生がタルボットとブリンケン、
オックスフォード大学が隠れた、英米関係とかヨーロッパとかポーランドとかのネットワ
ークの中心になる。

ロシアは逆に焼け太りで 4 % 成長した

経済制裁、ロシア側は最初から見越していた。インドや中国やそういったところに、イ
ランも、北朝鮮も、経済制裁、金融制裁でドルを使わせないからといって、いろんな抜け
道がある。それをやったらむしろロシアは逆に焼け太りで 4 % 成長した。

西側がインフルで苦しんでいるのに、ロシアも今はインフレで物価は上がっているが、
軍事的ケインズ主義というので経済成長も同時にしている。

もう一つは、ロシアはエネルギーだけでなく、昔はスターリンが 1933 年飢饉でウクラ
イナやロシア農民を犠牲にしたので、農業問題が一番のネックだった。しかし今ロシアは、
水と、空気と、農業生産の国になった。

今の EU がドナウ派とバルト派の 2 つに割れてしまった

西河：お酒もできる。

講師：おっしゃる通り。ジョージアのワインは有名で、だんだん暖かくなってロシアの
ワインは結構美味しい。あの国は耐える力、片方でチンギスハンと戦い、片方でポーラ
ンド騎士団、ドイツ騎士団と戦い、バイキングと戦う。バイキング・グループは、みんな
NATO 北大西洋条約加盟国となり、バルト海周辺の国がみんなフィンランド、スウェーデ
ンまで今回入った。

ところが、南の黒海に当たるところは全部、ドナウ、ドンとかドナウ、ドンとかドン・
コサックとか、ドンというのは何かというと「水底」という意味である。ドナウ川、ダニ
ューブ川、ドネツク川、ドン川、ドン・コサック、これはみんな水底という名の川である。
ドナウ川はドイツまで繋がっている。これはスラブ系の民が川辺・水辺に住んで生活して
いた時代のなごりである。

こちらのグループは、どちらかというと正教か、ユダヤ人もいるが、チェコだってスラ
ブ人であるし、ドイツまでロシアとの関係は余り絶ちたくない。だから、今の EU がドナ
ウ派とバルト派に見事に割れて、NATO がこれはどうなるのか。2 つに割れているのは事
実である。

西河：EU ができたからヨーロッパがおかしくなった。独立していた時は、一国一国の
文化があったが、EU になって移民が始まって、ぐちゃぐちゃになってしまった。

講師：フォルクスワーゲンにとっては良かった。安く私でもフォルクスワーゲンを買え
た。その代わりドイツ経済は悪くなった。

吉池：結局ウクライナの戦争は、いきつくところはどのように落ち着くのか。

西河：ロシアが勝って終わる。

吉池：ロシアが右側の東ウクライナを。

講師：そうそう、乱暴に言えばピンクの四州である。その後はどうやってこれを国際法的に認めさせるかということで、今言われている案の一つは、北方領土と同じようにする。北方領土は日本のものだと言いながら、日本がそこに物理的に攻撃することは一切ない。だから今度選挙をやるときは、そのことに疑いを持つウクライナ右派政党は参加させないということになりそうで、西ウクライナの極右グループはお引き取り願う形の政党形成が始まると思う。

吉池：ウクライナの人口の 5,000 万のうちの 1,000 万がロシアになり、残りの 4,000 万人が西ウクライナ人であった（1991 年段階）。

講師：不幸なことに、今ウクライナの人口は大体 30 年間で 1,000 万減り、今度の戦争でおそらく戦争でなくなったのはおそらく数十万でしょうが、女性が出国して、お金持ちの息子さんたちは出て行って、3,000 万人しかいないと思う。人口減少がこれほど極端な国はない。

吉池：NATO にも入れない。どのようにして暮らしていくのか。

講師：乱暴に言えば、ミンスク合意のときには、事実上ピンクのところを、憲法上の特殊な、要するに連邦制にすればよかった。ところが、ウクライナを単一国家にしたので、そこが一番の問題だった。もう一つ、クリミア半島は 1954 年までロシア領だった。

ウクライナは、不思議な国で国連加盟国である。1945 年から主権はないのにも関わらず。そのときは、クリミア半島はロシアだった。ところがフルシチョフ第一書記がやってきて、西ウクライナはまだゲリラをやっていたバンデラ派にたいし CIA が援助していた。あの頃の冷戦映画や小説を見ると、CIA のあのような映画を見ると、潜り込んで行って誰かを助けに来たとか 007 の原型みたいな映画が一杯あった。そういうゲリラ活動をずっと数十人が続けていた。1954 年まで、スターリンが亡くなるまで。フルシチョフがやったことは、それをやめる代わりにクリミアをロシア領からウクライナ領に変える。名前を変えるだけだった。そういう形でシンボリックに平和共存にするために、フルシチョフはそういうことやったので、北方領土問題でもフルシチョフが鳩山元首相に 2 島引き渡しを示唆する。

吉田派から鳩山派に移るときの 4 島のうちの 2 島は、いいよという理屈であったが、フルシチョフは、いい意味でも悪い意味でも、紛争の種を蒔いた。政治の世界というのは大変面白いもので、どこの世界も意外にずっと続いている。

G7 準備会議である英国のディッチリー会議で、ロシア側から出てきたのはモロトフ大臣の孫で、今プーチン政権のブレーンであるが、この人のおばあさんは、ニューヨークとロンドンとかで、ユダヤ人であるから政治工作をやっていて、それで逆に 1948 年にイスラエルができたとき、ゴルダ・メーヤーがイスラエルから大使としてやってきた。

そのとき、彼女はイディシ語で「私はユダヤ人の娘である」と言ったら、それを KGB が聞いていて、早速政治局員たちの奥さんで同じようなグループのユダヤ系の人みんな、ロシアのカザフスタンの女性政治犯収容所に全部連れて行かれた。旦那の奥さんたちを全部捕まえて、外務大臣もそうであるから高位高官の夫人らがカザフの女性政治犯収容所に追放になったが、文句も言えない政治局会議であった。

これは米原真理さんという有名な通訳の方で、お父さんが共産党に関係していた人が、チェコに共産党のネットワークがあって、そこに留学した自分の先生がその出身で、共産党の影の部分暴露する。真理さんがそういうことを書いて、こういうことだったというスターリン時代のことが話題になった。

吉池：やっぱりこのピンクのところはもう別れちゃう。

講師：事実上そこは正教の中でも頑固派である。

西河：住民に聞いた。ロシアとウクライナどっちがいいか。

講師：住民投票をプーチンはやったと言っている。何%が賛成したかはよくわからない。ただ、ウクライナ側が妨害はできなかったことも事実である。

吉池：ロシア語でやればね。そういう人たちでしょ。

米国とロシアだけで、なぜウクライナ戦争を終わらせることができるのか

小平：ウクライナ戦争を終わらせるのに、米国とロシアだけで話が進んでというのはウクライナが統治能力を相当失っているというのが前提にあると考えていいのか。

講師：事実上、ゼレンスキー政権はアメリカのそういう金で作った政権であるから、3,500億ドルの軍費。戦争に大体ひと月60億ドルかかるので、これが結局アメリカ、EU、日本で分担している。日本も相当払っているはず。

小平：そこで支えているから、それを引いちゃえば止まっちゃうということか。

講師：そういうことになる。お金が。

西河：最近の一番新しいニュースだと、イーロン・マスクが、USAIDという組織を潰すという発表している。世界で起きているニュースになっている紛争は、全てそのUSAIDが関与していると。ニュースに上がるということは、マスコミイコール、ディープステートだということである。トランプ大統領の発言とイーロン・マスクの発言と、今度FBI長官になった人の発言と、あとロバート・ケネディ保健相、この人たちの話を聞いておくと世の中が見えてくる。

西河：結局、トランプは、お金をどんどん減らしていこうということを、やっていくから、多分軍なんかもみんな引き上げる。

講師：朝鮮半島も。

西河：日本からも引き上げるかも知れない。それでできた金を国民に75万ドル払う。ことをすればアメリカの経済はよくなる。トランプは任期中の4年間で多分取り組むことを考えている。

講師：トランプ、1回大統領を経験しましたからね。1回目はひどかった。

西河：1ヶ月で大統領令を100枚以上。細かいとこまでシナリオを決めて全部やっている。

講師：だからケネディ暗殺の真相まで。ケネディ一族から1人リクルートした。

西河：UFOの情報も流すって言っていた。

長谷川：東側がロシアになって NATO にも入れない結末は、始まったときからもうわかっていたのか。

講師：そうでしょうね。

長谷川：今まで続いたのは、西河さん言われたお金が投じられているからか。

講師：お金が出て、西側もメンツがある。NATOは軍隊を出している。

西河：民主党が悪党である。

小平：ドイツが経済的に劣化した背景にウクライナ戦争の、例えばガスの供給のコントロールとか、勝手に想像するが、ドイツにとっては非常に不利な戦争だったのか。

講師：いやもう踏んだり蹴ったりじゃないか。ドイツが一番おそらく被害を被った。

小平：ドイツが一番良い伸びをしていたところが、この数年で非常に劣化した。

講師：自爆だった。アメリカから見てもロシアから見ても、ドイツが怖い存在であったわけで、ロシアからドイツに行っているノルド・ストリームというパイプラインを誰が爆破したのか。犯人が、本当に出てきたら大変なスキャンダルになる。

言われている話は、二つの説があって、一つはバイデン政権そのものがノルウェーか何かと組んでやったと、ピューリッツァー賞をもらった有名なジャーナリストが言っている。ただこの人は、表向きのメディアでは書けない。だから YouTube に掲載している。

もう一つの説をドイツの検察が言っている。ザルージヌイという NATO 系の人気がある将軍が命じたと。ゼレンスキーはそのときは直接関与しなかったというのは、ドイツ検察のシナリオで、ドイツの警察が動いている。ヨットかなにかでポーランドからやって爆破したと。

ロシア、日本にはガスを止めずに送っている

吉池：先ほどドイツのパイプラインを絞っているが、東の方の日本には相変わらず出している話は、日本はそれなりのものを払っている。日本も全部閉まるとおかしくなる。

西河：その話の中で相当悪いことやっている。

吉池：日本のお金はドルで、外貨稼ぎじゃないのか。

西河：でもマスコミは、ロシアはけしからんと言う。

長谷川：日本政府は、判断できているのか。

西河：多分できてないでしょ。

講師：「ドンロー宣言」と言っていて、昔モンローというのは、アメリカだけの孤立主義であるから、ドンロー宣言と言うが、グリーンランドはその一部だという。デンマーク政府は、兵士が 3 万人位しかいないから、3 万人全部でグリーンランドを守ることにはできない。ロシアのタブロイド紙は、大変面白いことを言っている。要するにグレナダ侵攻をやったレーガン政権一期だと。そういう意味では共和党は戦争はしない。

西河：戦争をする大統領がノーベル賞もらっているのはおかしい。

講師：ロシア人たちの言い方は、自分たちは独自の文明だと。多極化というのは言い古されてあまり面白くないが、独自の文明で、片方で西側文明というのは、そろそろ終焉を迎えている。世界はユーラシアとアジアということでインド、中国が大事である。

面白いのは、デンマーク人ある。一つは先ほどのグリーンランド、もう一つはベーリング。ベーリング海峡を見つけたのはロシア皇帝の命で、デンマーク人のベーリングが見つけた。その頃、ロシア人たちはたくさんアジアにも出てきていて、今のサンフランシスコあたりまで結構ロシア人が住んでいた。フォートノックスとか、あの辺はロシア人が住んでいてロシアン・バレーという地名まである。北側からロシア人がやってきて、南側はメキシコのサンタ何とかとかというサンフランシスコとかサンタ・フェとか。ロシア人とカトリックが西海岸辺りを分割していた。それが統一してだんだんそれこそアメリカができる。メキシコ人たちがメキシコからテキサスを目指すという。

西河：日本人はみんな仲良くしようって。だからすごい民族だ。

吉池：仏教と神道もあり、キリスト教もあり、なんでもある。

西河：八百万の神。

講師：戦国時代末期から、西日本はキリスト教を大名たちの世界で、その裏にあったのが石見銀山だ。金の種子島。

西河：西が入ってきたから戦うようになった。米だけ作っている分には戦う必要はない。

吉池：島国だから。これが韓国と、日本と、中国と、ロシアと、全部が地続きだったら毎日戦争が起きていた。

講師：ドーバー海峡は 10 キロであるが、日本は玄界灘があった。これがあったから九州に元寇も来なかったし、一部来たが追い返した。日本はすだれ国家だと言われる。すだれが掛かっていると、内から外は見えるけども、外から中は見えない。日本にはたくさんの事物が、正倉院を見ればわかるように、景教か回教かネストリウスか何かわからないのが結構入っている。よくルーツを調べてみると、何とか神社なんていうのは神社の歴史、白山神社だとか。神宮だとか、それぞれいろいろ違う。仏教でも政治の話はある人から聞いて「東本願寺と西本願寺で違いがわかるか」と問われて、「全然わかりません」と答えた。

西河：仏壇の柱の色が違う。黄金のと、黒いのと。黒が東本願寺。

講師：西本願寺総代は、政治家の何先生とかとそれぞれ違いがあるそうで、そういうことがわからないと政治の世界は成り立たない。

川で戦争を止めるという発想はある

長谷川：日本には海がある。ある人が国境に川があると戦争は起こらないと言っていた。

講師：そうである。今度もドニエプル川で止めようとしている。今、この戦争の隠れた仲介者は、ローマ教皇だと思っている。フランシスさんが新たな核戦争になりかけた半年後の 2022 年の 10 月 11 月相当動かれた。

それで一番危なかったのはドニエプル川の反対側にロシア兵が 3 万人位いて、これが川を渡ってダムがあったが、そこに移るときに NATO 軍が急襲すればプーチンは危なかった。結局そこで動いたのはローマ教皇で、それで 3 日で渡ってしまう。その代わり、ヘルソンという都市はウクライナ側に渡して今度、プーチンはおそらく妥協するかもしれないと、ちらちらと話が出ているが、川の向こう側のヘルソン州は、ウクライナにしてというシナリオはある。

今はドローンの戦争で橋を上からドローンが監視しているから、小さな船で渡っても、ウクライナ軍は全滅した。同じことがロシア側にもある。おそらく川で戦争を止めるという発想はある。逆に言うと、プーチンが本当に勝とうと思えば、さらに大きなドニエプル川というキーウのあの川には、12 ヶ所橋があるが、これを全部キンジャールっというミサイルで攻撃すれば、たちまち東ウクライナ、西ウクライナも、ものの流れも全部終わってしまう。

プーチンが本気でやろうと思えば、そういうシナリオもあったがそれはやらなかった。

ソ連は東部 4 州が欲しかった、その提案したのはゼレンスキー

吉池：当初は全部欲しかったのではないか。

講師：いいえ、私の見方は最初から東部 4 州である。ミンスク合意はあそこに自治権を与える。4 州ではなく、2 州に自治権を与えて住民投票をやるというのが、ゼレンスキーが和平派で出てきたとき、クリミアは別であるが、提案したのはゼレンスキーだった。

ところがゼレンスキーは、モスグリーン派、テロ集団にやられかけて、それで変えた。多分プーチンは250万の都市を攻撃するとしたら、おそらく数十万の兵士を出さなければいけなかったはずがキーウを攻撃した時、10万人である。

この情報は全部筒抜けになっていた。東ウクライナの銀行家がモスクワに軍のスパイの友達がいって、どこに攻撃するかという情報をキーウの空港に空挺部隊を出して攻撃することがわかっていた。その情報を軍情報部が得て、それでカナダ政府とアゾフ連隊が待っていて、それでロシア空挺部隊が一掃された。ゾルゲみたいな人がスパイにいて、交渉団に入っていたが殺された。

アメリカの前線のプロは皆この NATO 東方拡大は愚策だと

その後イギリスの首相が乗り込んできて、武器は好きなだけ提供すると言ってバイデンもプーチン体制を壊さないと駄目だと言ったので、長期戦に入った。3日で終わるという最初のプーチンのシナリオは壊れた。

猫と狸の化かし合いみたいな、政治情報で相手を操作しているうちに、情報戦に自分が引っかかった。どちらが仕掛けたのかよくわからない。戦争になるとCIAが言い始めて、そのCIA長官はアメリカきってのできるバーンズ大使、しかもNATO東方拡大に反対のウィリアム・バーンズの前のCIA長官だ。アメリカの前線のプロの人はみんなこのNATO東方拡大は愚策だと。アメリカがやめるべきだと。それを結局やったのがクリントンである。私はクリントン原罪論である。

西河：戦争が長引けば喜ぶ人がある。

座長：最後にアメリカのご専門の下斗米秀之先生から最後に一言あるか。

下斗米秀之：共和党がロシアとの関係があるというのはそうだが、共和党は共和党で今トランプ党になっていて、そこの違いというある種の分断はある。国内分断と世界の分断、なにかもうブロック経済みたいにポコポコと駆逐しているように聞こえて怖くなった。その辺はいろいろ議論させていただければと思う。

座長：どうもありがとうございました。

以上